

## 組織行動研究

# No. 24

編集後記にかえて

### WAI プロジェクトを 終えて

● 組織行動研究 No. 21 の後記で、ヤット WAI 研究の基礎であるヨコの研究が一段落した。次号は、いよいよ待望のタテの研究だと書いた。

既に述べたことであるが、著者が WAI について関心をもち、折りにふれて試用しはじめたのは、30 余年も前のことである。併し、TAT その他、アレコレと忙がしく、一応、本格的に手をつけたしたのは '83 である。以来、略々 10 年かかって、やっと、パーソナリティ把握のための一つの道具とし

て、なんとか使えるところまでこぎつけたという感じである。

● これは著者の現在までの研究生活の感想であるが、一つのテーマというかプロジェクトをこなすのには、大体、数年かかる（勿論、テーマの大きさ、プロジェクトの体裁にもよるが）。

併し、一つのテストをなんとか使えるようにするには、大体、10 年かかるというのが実感である。

ということは、研究者生活を 30 数年として、大体、3~4 本ということである。この辺のところをよくわきまえて、対象・プロジェクトをえらばないと、生産性、やり甲斐が問題になろう（著者にとっては、今更、こんなことを云ってではじまらないが）。

● まあ、それは扱っておき、本論文の目玉の一つは“4 WAI 反応の相互関連性の分析”である。これは、岩熊の修士論文であり、恐らく、初めて“一人の個性をもった、特定の、具体的な個人のセルフ・イメージの構造”に科学のメスを入れたものである。このような個人のパーソナリティの中心部分に、実験的手法で切り込んだものは恐らく、はじめての試みであり、学会でも注目を集めたものである。具体的な内容は省くが、今後、このような「個人的構造分

析」がすすむようになれば、パーソナリティの「個性記述的」な研究も、地に足がついたものになろう。

● 日玉のもう一つは“5 事例分析の試み”である。ここで、使われたパーソナリティ・スキーム (表 5-1) は、No. 19 で述べたように WAI の実証的研究から帰納的にえられたものである。このスキームに従って、情報を集め (テスト・バッテリー)、それらを総合してパーソナリティ・スケッチを描きだすことによって、個人のパーソナリティを包括的に把握することが可能となる。(5-1, 5-2 参照)

この場合、比較的、簡便に全体像を把握する方法として、SCT と WAI の組合せが考えられる。この二つのテストは、その特徴が相補的であるから、これらを組合せることによって、よりよい把握が可能となる。これが、本研究の最初からの大きな狙いの一つであることは再三述べた。そして、それがほぼ狙いどおり達成されたということは、事例を見れば御理解頂けたことと思う。

コレデ、ヤット、一丁アガリ。  
ヤレヤレといったのが現在の心境である。

(榎 田)

慶應義塾大学産業研究所社会心理学班研究モノグラフ

組織行動研究 (第24号)

責任編集 榎田 仁・南 隆男

KEIO STUDIES ON  
ORGANIZATIONAL BEHAVIOR AND  
HUMAN PERFORMANCE No. 24  
MARCH 1993

〒108 東京都港区三田 2-15-45  
発行 慶應義塾大学産業研究所  
電話 03-(3453)-5640 (直通)  
<平成5年3月28日>

〒104 東京都新宿区高田馬場 3-8-8  
印刷 株式会社国際文献印刷社  
電話 03-(3362)-9741 (代表)  
<平成5年3月21日>